

## 草創期の学生生活支援

### ——創立者と生活協同組合の誕生と活動——

吉 郷 研 滋

こんにちは。ご紹介いただきました吉郷でございます。

本来であれば、今、私が仕事している国際室長としての話をすべきだと思うのですが、どういうわけか40年前の話をしてほしいという依頼をいただいております。みなさんも私の年齢になったら分かると思いますが、30年前のことも40年前のことも頭の中では、もう一緒になって区別できないことがあります。そのために場合によってはこれからお話しする内容には、時系列の誤りが少しばかりあるかもしれません。この内容については後に編集する予定だと伺いました。その時に時系列についての整合性をつけることをお願いしたいと思います。

私は創価大学での学生生活を2年間の留年を含めて全部で6年間過ごしました。理由は今でもよく分かっていませんが、フランス語Iだけを落とし続けて、そのせいで2年間も留年しました。大学6年目ときに創立者から「何を遊んでいるのだ」とのご注意がありまして、気持を入れ替えて大学を卒業しました。その後、創価学会本部の職員として働くことになりました。

この6年間の学生生活のなかで大半を占めたのは、生活協同組合学生組織部の活動に取り組んだことでした。これを通して、私は社会的なことも含めた様々なことを学ぶことができました。この生活協同組合は、現在ではコープという呼び方になっています。創価大学にも生活協同組合はありましたが、すでに解散しています。今は株式会社創学サービスがあります。かつての生活協同組合の拠点があった福利厚生棟という建物は中央体育館の隣にありました。この中央教育棟が建つ前のことです。その建物も今はもうありませんので、みなさんにはイメージが湧きづらいのではないかと思います。

昭和46年の開学当時、大学周辺には何もありませんでした。何しろ丹木町は山のなかです。八王子駅から大学まで来ることを、学生は「登山する」と言っていました。反対に大学から帰るときは、「そろそろ下山するよ」と言われていました。バスも今のような頻繁には走っていませんでしたから、八王子駅から寮まで歩くことも当たり前でした。丹木町の交差点に信号機が付くというだけで、近隣の人たちが集まったり、大学祭で花火を打ち上げたら、近所で飼っている牛が驚いて柵を壊して逃げたので仲間と探したりと、自然豊かな環境でした。ですからまずはどうやってこの山のなかで学生が生活を成り立たせるかということが、開学前からの一番大きな課題

でした。近くには店も何もない。でも寮生はたくさんいる。そこでの学生生活をどう支えるか。

当時はどこの大学にも購買部がありました。それを運営しているのが生活協同組合です。みんなでお金を出資し、組合をつくり、物を大量購入して、それを安く組合員に販売することをしていました。創価大学にも、私たちの入学以前に、生活協同組合が発足していました。入学した学生がスムーズに日常生活を送ることができるように、という創立者からのご配慮でした。学生生活については創立者が一番ご心配をされていたことでもありました。そのため大学に提案をして、それを受けて大学側も福利厚生棟のなかに購買部と食堂をつくりました。実際に開学当時にはすでに、大学での学生生活を成り立たせる必要なものは整っていました。

その生活協同組合は職員中心の組織でした。この組合の構成員の多数は学生ですから、その学生の意見が反映されにくい状態はあまりいいことではないということで、入学した学生のなかで、学生の組織部をつくってほしい、との要望がありました。みなさんをご存知のアメリカ創価大学の羽吹学長は創価大学の1期生ですが、彼のお父さまの羽吹葉さんが専務理事として、創価大学の生活協同組合を運営していました。私も1期生だった縁で羽吹さんとは同級生でした。当時彼から「父親が生活協同組合をやるから、手伝ってもらえないか」と言われて、「私は分かったよ」と言ったのが運のつきと言いますか、それが縁で学生に呼びかけをして、学生の生活協同組合の組織づくりに参加することになりました。そういう経緯もあって、学生としてはじめて私が理事に選出され、生活協同組合の理事会で発言できる立場をいただきました。学生組織部や他の学生の意見を代表して、生活協同組合を運営していったということです。

当時の生活協同組合は、先ほど申し上げたように福利厚生棟のなかにありました。1階が食堂、地下1階も食堂でした。説明しづらいのですが、その建物は土地の斜面を利用して建っていたので、地下2階が購買部と喫茶コーナー、地下3階に学生自治会や学友会などの学生関係の部屋がありました。この福利厚生棟のなかに、学生組織のすべてがあり、ここが学生生活の場になっていました。他に大学の敷地にあるのは、体育館、普通教室、そして大教室だけです。そのため福利厚生棟は学生のたまり場になっていました。この福利厚生棟で生活協同組合の学生組織部を立ち上げ、活動をしたわけですが、当初は何をやったらいいのかまるで分かりませんでした。まず先輩がいません。卒業時に書いた文集を開くと、「一人が4役も5役もこなす状況」と私も書いています。

この当時私は柔道部もつくろうとしていたのです。創価学園には柔道部がありましたが、私はその柔道部の出身でした。当時の経済学部長だった関順也先生は、京都大学で相撲部の部長もされていたのですが、「吉郷君、創価学園からきた柔道部員を調べて大学に柔道部をつくろう」と言われました。簡単に言われましたが、つくるとなると大変でした。部員を集め、学生柔道連盟に加盟するために講道館にも通いました。また当時は学年にクラスがあって、そこで様々な役割がありましたし、さらには学生自治会の設立の手伝いをお願いされたりするなど、色々なことが同時にグッチャグチャになりながら取り組んでいました。本当に一人4役も5役もの状態でしたが、それでも徐々に役割を整理していった、最後に残ったのが、この生活協同組合学生組織部の

仕事でした。

この学生組織部が立ち上がり動きはじめた頃に、ある大学の生活協同組合の学生組織部の学生が、創価大学の生協組織部の学生代表に会いたいということで話し合ったことがあります。私は当時まだ1年生でした、訪問に来られた学生は3年生か4年生だと思います。全国の生活協同組合連合への加盟をしたらどうかという話でした。何度も足を運んでいただきましたが、最終的に創価大学が選択したモデルは慶應義塾大学のやり方でした。連合に加盟せずに、大学独自に運営していったからです。

学生組織部ができてからは、いろいろ課題が出て運営も大変でした。学生数もまだそれほど多くありませんでしたし、できるだけ安価で提供したいと思っても、なかなか上手く行かないところもありました。運営していた食堂に対しても、「あまり美味しくない」とか「値段が高い」とか、様々な意見を言ってくれる学生も出てきました。そういう意見を調整しながら運営に努力しました。

開学から2年後、昭和48年(1973年)に第4次中東戦争が起こりました。日本は空前のオイルショックになりました。トイレットペーパーをスーパーに買占める光景を昔の映像で見たことがある人がいるかもしれません。原油の高騰で日本に石油製品が無くなってしまうと言われました。そのため、みんなが一斉にトイレットペーパーを買出しに出ました。在庫が減り生産も間に合わなくなり、スーパーの店頭からトイレットペーパーが消えました。また、ノートとか、関係のない砂糖などの日用品も高騰し品薄になってしまうなど、日本全体が不安定な状態になっていました。

その当時、創大生協も同じような状況でした。羽吹専務がご苦労されて、あらゆる取引先を頼って、学生が困らないようにと、不足しがちな品物を必ず充当していました。当時の学生生活を一生懸命に守りました。これは羽吹専務をはじめ職員のみなさんが、創価大学の生協に品物を入れる取引先の人々に対して日頃から誠実に対応していたからだと思います。これがきっかけで私も取引先の会社の人々と非常に仲良くなりました。

福利厚生棟には喫茶店がありました。創立者が欧州等を歴訪されていたこともあって、「将来、みんな世界に雄飛するように」との思いで、「喫茶ロンドン」という店名をつけてくださいました。私はこの喫茶ロンドンの運営をやっていたから、当時は自分が学生なのか、それとも職員なのかよく分からない生活をしていました。毎朝滝山城跡に行き、そこで滝山の水をいっぱい汲んで持ち帰り、その水で朝一番のコーヒーを入れるという役目を担っていました。その代わりに、私が「一番コーヒー」を飲む権利がありました。毎朝ですが喫茶ロンドンに、取引先の担当者が納品に訪れます。その仕事が終わると、みんながコーヒーを飲みながら話し合いをする。そこに私も参加させてもらう。今の学生のみなさんからすると、授業に出ているのかなと、疑問に思いますよね。その通りで結果として6年間の学生生活になってしまったわけです。そうした生活を送りながらも、羽吹専務をはじめ職員のみなさんが取引先の人々を大事にしていたことは間違いありません。このことが、当時のオイルショックにあっても、学生生活を守ることにつなが

ったのではないかと思います。

学生の生活を守る助けになればと、大学内でアルバイトができるようにしてはどうか、というご提案を創立者からいただきました。喫茶ロンドン、購買部、食堂等でアルバイトを募集することになりました。生活が大変な学生がたくさんいましたから、これは学生から非常に喜ばれました。アルバイトのなかで非常に印象深かったのは、創価大学の3年目に大学で夏季講習会が一カ月の期間開催された時のことです。創立者も大学にお泊りになっていました。そこで様々な品物を販売するコーナーを用意しました。先ほどもお話したように、創価大学の周りにはまだ何もありませんでしたから、夏季講習会に参加した人たちが、食べたり飲んだりお土産を買ったりするのに困らないように大学生協でフォローしてほしい、との依頼があったからです。食べ物や記念品等を販売するためのテントを立てました。学生の組織部や他の学生も巻き込んで、毎日販売した思い出があります。夏季講習会に参加された人々には大変に喜んでいただきました。仕事が終わり戻ると、私も仲間もみんな疲れきって、夜は合宿所のように雑魚寝しました。その前の夕食では、アルバイトの仲間が食堂に集まって、大鍋にインスタントラーメンをたくさん入れて、スープも入れて、余った野菜などの具も全部そこに入れて煮込んで、それを食べた思い出があります。すごく美味しかった。たまに腐りかけているのではないかとと思われるサンドイッチも食べました。そのときの羽吹専務の一言が思い出されます。「みんなは元気で仕事しているから、体力も充実している。こんなときは腐りかけたものを食べても、何ともならないよ」と言われまして、本当かなあと言いながらも、美味しく食べて、誰もお腹を壊さなかったですね。たぶん腐っていなかったのでしょうけれど、今の学生さんは真似をしちゃいけません。

それから当時は大学の記念品がまだありませんでした。そうした品物をつくろうということになりました。最初に取り組んだのは、今も文系A棟の前にありますが、ブロンズ像のメダルをつくることでした。メダルと言っても、誰もできません。当時の事務局にはそのような余裕はありませんでしたし、生協でやろうとしても、生協の職員は少人数でしたから、メダルの作製の時間もない。そういうこともあって、羽吹専務から私がやるように言われました。羽吹専務は大阪の内外工芸社という非常に有名な会社を紹介され、それ以後生まれてはじめてデザインから製作まで責任を持ちました。大変でしたがとてもやりがいがあり、楽しかったです。多いときには週3回も大阪に出張しました。しかし私は学生ですよね。あるとき東京駅で鞆を抱え立ちながら、ふと「俺はいったい何者なのだろう」と自問自答した覚えがあります。それでも、誰かがやらなければ、品物はできません。メダルをつくれれば、創立者も喜んで使ってください。大学を訪れた人々もきっと良い思い出になる。とにかくメダルづくりには一生懸命に取り組みました。先方の会社の担当の人たちも、私が学生なのか職員なのか分からなくなるくらい親しくなりました。最後には本当に素晴らしいメダルができました。そのメダルは、3年4年で売切れてしまって、今はもうありません。最初に打ち出した原版は私が持っています。草創の先輩方はみんなそういう気持ちだったと思います。

創価大学には全国からたくさんの人々が訪れます。お越しいただいたみなさんがお土産として

買えるもの、しかも創価大学らしいお土産を考えてほしいという要望がありました。今となつては笑い話ですが、そこで羽吹専務が考えたのが羊羹（ようかん）でした。青梅にあるお店で売っていた塩羊羹を、食べて美味しかったから、創価大学の名物にしようと言われました。大学と羊羹なんて結び付きませんが、世間的には土産や記念品の定番として羊羹はよくあるものですね。青梅で売っている羊羹を購入してそのまま売っても意味がないということで、それを「ブロンズ羊羹」と命名して、包装紙をブロンズ像のデザインが入ったものに変えました。これが爆発的な売り上げで、生活協同組合にとって大変な利益になりました。ただ生活協同組合は単に世間的な利益を上げようとするわけではありません。利益を上げた分はすべて学生に還元しなければいけません。収益分は購買部の品物の値段を下げたり、食堂の内容を良くしたりして、結果として学生に還元しました。この時の羽吹専務の発想はたいしたものだなと思い、本当に感動しました。さらに大学生協が学生生活の根本を支えながら、メダルやボールペン、ノート、しおり、羊羹など、色々な物をつくったり売ったりして、創立者にも使っていただきながら、創価大学のイメージを全国各地に流布していたのだと思います。

話は変わりまして第1回創大祭についてお話させていただきます。大学祭を開催するためには、当然ですが運営資金が必要です。普通であれば、学生が大学祭のパンフレットを製作して、そのパンフレットに広告を集め、その収入を運営資金に充てます。学生自治という観点からも、大学から資金を貰うのではなく、学生が自ら資金を集めて、大学祭を運営していく。草創期の創大祭でも資金を学生が自らの手で稼がなければならない、ということになりました。実はそれを任されたのが生活協同組合でした。どういう理由だったか、記憶が定かではないのですが、生協でパンフレットを作製して、そこから資金を集めてほしい、そして寄付も募ってもらいたい、こういう大事な任務がありました。当時は羽吹専務が様々なアイデアを出されました。まず大学祭のパンフレットを作製する。それに広告を載せる営業をして、広告料をいただく。広告は表紙を開けたところにあるスペース、その後ろのスペースなどそれぞれ値段が異なります。私は裏の一番よいところの広告スペースの値段を10万円に決めました。創価大学は、開学したばかりでネームバリューありませんでした。それゆえまずは創価学会関係の会社から営業をはじめました。信濃町に博文、東西哲学書院という会社があります。今は土産屋、本屋、そして中華はくぶんというレストランなどを経営していますが、昔から本屋とレストランを経営していました。私はその会社の社長にお願いに行きました。有名な社長さんで、もう亡くなりましたけれども、お話をした途端に叱られてしまいました。開学したばかりの大学の広告費に10万円の値を付けるなんて、君は何を考えているのか。隣の慶應義塾大学だって、言ってきたのは3万円だぞ。君は世間の常識というものを知らな過ぎる、と。私は、大学祭の運営資金が足りないので何とかお願いします、と頼み込みました。すると社長は、わかったけれども、これから一週間、私が出社する時間に毎日ここに来て誠意を見せなさい、と言われました。私は一週間、八王子から信濃町まで通いました。出社前の社長を待って「今日も来ています」「今日も来ています」と言いました。社長も徐々に笑いはじめて、じゃあ他の会社も紹介しようと言ってくれ、最終的に広告料の10万円を



いただきました。良く覚えておきなさい、創価大学生だからといって、創価学会員に甘え、創価学会の企業に甘える根性だけは捨てなさい、それだとみんなのためにならないよ、と社長は言われました。世間をよく見て、厳しさも知らなきゃいけない、と。世間の相場というものもあるのだ、と。そういうことを学んでいけ、と教えられました。その後も、他の会社を回りながら、広告を集めてパンフレットをつくりました。このことは私自身にとって本当に良い経験になりました。

当時の生協でも書籍を売っていました。これも羽吹専務の提案でしたが、もしかしたら今もあるかもしれませんが、そこで書籍を5冊とか10冊とかまとめて買うと、割引になります。その割引分を大学祭の収益を回すから、本を売り込んだらどうかと言われました。写真集や新刊が出されると、それを車に積み込んで、様々なところを回って、買うのでしたら大学生協から10冊を買ってくださいとお願いしました。定価で買っていた後、その売り上げを生協に納めるときに、そのうちの何割かをマージンとして大学祭の運用資金にいただけました。毎日毎日都内を回って、たくさんのお宅へ伺って本を売る。まさに営業マンのようでした。

こういういろいろなアイデアを授けてくれたのが羽吹専務でした。学生もそこから勉強しました。当時の他の学生からみると、お前たちは何やっているのだ、クラブの活動というわけでもないし、職員の手先をやっている、と言う人もいました。それでも生活協同組合の組織部の学生は、そのなかでアルバイトをしながら、生きた学問を学ぶことができたと思います。そのときの経験が後々生きてきました。

これまでの話しのなかでよく出てきた羽吹専務は、本当にユニークな方でした。専務の呼び名が学生の間で通用していました。誰も羽吹さんとは呼ばなかったですね。みんな専務、専務と慕って、色々な相談をしたり、時には学生のご両親が相談に見えたり、本当に学生の面倒を一生懸命に見てくださいました。また、生活協同組合の組織部も大変にお世話になりました。その羽吹専務の指示の下で、他の人から見ればやらされているように見える部分もあったでしょうし、自分たちも、時にはやらされているのか、やっているのか、分からなくなるようなこともありましたけれども、結果として、多くの貴重なことを学んでいたのだと思います。

また羽吹専務は、人に会う場合には相手にどれだけ自分の印象を残せるかが大事だから、人に話をするときには、一期一会だと思ってインパクトを与えられる人にならなさい、と言われました。これは羽吹専務が自ら実行していたことでした。新宿の西口に住友ビルがあります。三角ビルと呼ばれています。その三角ビルができた当初から、50、51、52階のレストラン街に、ジローというお店がありました。今でもあるかどうかは分かりませんが、ファミリーレストランの奔りのようなレストランでした。羽吹専務は生協組織部の学生全員、あの時は10数人いましたけれども、さらに職員を加えて、合計で20人くらいを、開店したばかりのこのレストランへと食事連れ出しました。席についてから、オーダーは全部やるから、と言われました。店員を呼んで、何を言うのかと思えば、このメニュー表に載っているメニューを全て一品ずつ持ってきてくれ、飲み物から料理から全部一品ずつ、全部持ってきてくれ、と言われました。店員は目が点に

なっていました。みんな食べ盛りですから、全部出てこようがそんなものはまったく苦にもなりません。みんな残さずに食べました。最後になって、レストランのシェフが出てきました。そしてみなさん方は一体どのようなつもりで全部を注文したのですか、同業者ですか、と怪訝な顔をして質問してきました。そのとき羽吹専務は、同業者です、と答えました。八王子の郊外に、創価大学という大学が新しくできて、そこの食堂部門とか、喫茶部門とかやっている、また手伝ってくれている学生と職員です、と続けました。そしてこのお店は素晴らしいお店だから、ここでみんなしっかり味もサービスも学ぼうと思い全員を連れてきましたと、せっかくだからみんな食べてみたいと思い、全部オーダーしたのです、と言われました。それを聞いたシェフは、創価大学という大学ができたのですねと感動した様子でした。これ以後、創価大学はジローでは一躍有名になりました。たった一回でしたけれども、羽吹専務は、いろいろなことを考えて、印象を持ってもらうことをやっていたのだなと思いました。

私がまだ創価大学の1年生のときでしたが、4年生になってみんなが卒業すると同時に就職ができるようにと、その頃から、創立者は一生懸命に1期生の就職先を開拓されていました。羽吹専務は、創立者がそれだけやってくださっているのに、私たちが何もやらないのは申し訳ないと言って、吉郷君、君が開拓してきなさい、あなた方が最初の卒業生になる訳だから、といわれました。私は実際には4年間では卒業できませんでしたが。専務は、友人の建設会社の人事担当専務に面会の約束があるから、今日のお昼に行って、創価大学卒業生の就職を依頼してきなさい、と言われました。霞ヶ関ビルの最上階にある霞ヶ関クラブ、これは財界人が集まるようなところですが、そこに学生の私が行くことになりました。もう右も左も分かりませんでした。人事担当専務との面会がはじまりました。「どうぞ、いらっしゃい、いらっしゃい」と言われて、テーブルにつきました。ここからが地獄のはじまりでした。テーブルに座ると、目の前にあらゆるフォークとナイフがダースと並んでいるわけです。人事担当専務も向かい側へ座られて、話のはじまり、料理が運ばれました。「遠慮しないで食べなさい」と言われるのですが、私には当時どうやって食べたらいいのか分からなかったのです。今のみなさんは、ご存知でしょうけれども。私は「はい、ありがとうございます」と言って、とにかく相手が取るものと同じものを取ろうと思って、まずはジッと見て、相手が取ったら、ホッとこちらも同じものを取って、その繰り返しでした。本当にそれは恥ずかしい思いをしました。何を話したかまったく覚えていない2時間でした。大学の色々な話をしたと思います。でも食事のことで頭が一杯なのに、それでも何を食べたかすらも覚えてない。これじゃいけないと思いながら八王子に戻り、羽吹専務に報告をしました。専務はかつて戸田先生が言われたことを話してくれました。青年は、普段は質素な生活をしていても、月に一回、無理ならば半年に一回でも豪華な食事を堂々と食べに行くのだ、と。そうしないと馬鹿にされるよ、と。またそういう人材になるのだ、と。普段は質素でも、お金をためて行きなさい、と。私も貧乏でしたから、そこからお金を貯めて、一人で都内にあるホテルすべてに行きました。オーダーの仕方からすべてを勉強しました。実はそれが後年非常に役立ちました。

八王子にうかい亭というレストランがありますね。そこで創大生がアルバイトできるようにお願いをしてきなさいと言われて、飛込みで行ったこともありました。先ず私がそこで雇ってもらい、やめる際には次の人を紹介して、そうやって何人かアルバイトに雇っていただいたこともありました。

ロワール食堂の造園の話をしたと思います。今はニューロワールと呼ばれていますね。昔はロワールという名前でした。当時では新しく追加でつくられた食堂でした。その前に庭をつくったと言われてました。なぜ私たちに言われるのか、そのときには意味が分からなかったのですが、食堂に来る人たちにそこを気持ちよく通って喜んでいただけるように、入り口のところに池をつくったり、植物を植えたり、造園に取り組んだわけです。この話には続きがありまして、ロワール食堂の造園が終わってしばらくした後、日大講堂で学生の総会が開催される予定がありました。そこに創立者もご出席されるというので、控え室の前に庭をつくったらどうか、と羽吹専務に言われました。材料等を職員みなさんに集めてもらい、それを使って土や砂利をひいて、草花をセットして造園をしたわけです。できあがった庭をご覧になられて、創立者は大変喜んでくださいました。激励もしていただきました。

大成功で総会も終わり、その日のうちにすべてを撤退させ、後片付けも終了して、ヘトヘトになりながら新宿駅まで行きました。ちょうど八王子まで帰る電車で甲府行きの電車がありました。今もあるでしょうか。この電車は普通列車ですが、途中の駅には停車せずに、立川と八王子だけ止まります。これで安心して八王子に早く帰れるということで、それに乗ったのです。あまりに疲れていたもので、車中で寝てしまいました。目が覚めるとそこは甲府でした。当時は携帯ありません。私としては、せっかく甲府まで来たのだから、まあ今晚はビジネスホテルにでも泊まって、一生懸命がんばったのだから、明日はゆっくり甲府見学でもしようと思いました。甲府ははじめてでしたので、一日見学して、夕方に八王子へ戻りました。そうしたら、創価大学では吉郷が行方不明になっている、ということで大騒ぎになっていました。羽吹専務が一番心配をしていました。創立者から激励をいただいたのだから、翌日その御礼のご挨拶に何うのが当たり前だろう、君は何をやっているのか、と鬼のように怒られました。それ以後、まだ学生でしたが、ポケットベルを持たされました。ポケットベルは、当時は出回ったばかりでした。ポケットベルがピ・ピ・ピと鳴り、呼び出しに応じてすぐ事務所に電話し用件を聞くというものです。今は携帯電話がありますが、昔はポケットベルで、ピ・ピ・ピと鳴ると、どこにいても事務所に電話しなければならない。おそらく当時の創大生でポケットベルを持たされていたのは、私だけだったと思います。それからズーッと卒業するまで、それを付けていました。

このように本当にいろいろなことがありました。羽吹専務を中心に創価大学生活協同組合は、創立者池田先生が言われた、教員も職員も学生もみんなが一体となって大学建設をやっていくのだ、ということを実現してきました。

創立者は学生生活の場である生協に、何度も何度も足を運んでくださいました。コーヒーを飲んでいたら、そこにフラッと創立者が入っていらしたこともありました。今では考えられないで



すよね。そこで先生が学生とコーヒーを飲みながらお話をされたり、また購買部に行かれて、たまたま居合わせた学生たちに、私が全部払うから、好きなものここから持って行きなさい、自分の分だけじゃなくて、お父さんお母さんの分も買ってもいいからね、と言われたりと、さすがに何でもかんでも買ってしまう人はいませんでしたけれども、そうやって生協が創立者と学生とを結び付ける素晴らしい場所になりました。そこには生協の職員もいましたし、学生組織部の学生もいました。創立者のご提案で、学生のためにつくってくださった生協です。卒業生、職員、あるいは来学された方々も、喫茶ロンドンでたまたま創立者にお会いでき激励していただいた、ということもたくさんありました。そのため喫茶ロンドンは海外でも有名になって、イギリス SGI の初代理事長のリチャード・コーストンさんが、喫茶ロンドンのことを知り、イギリス SGI に「喫茶ロンドンを支援する会」をつくってくださいました。

今日（2014 年 6 月 27 日）の聖教新聞に掲載された創立者の随筆の「創価教育の大道」のなかに、ちょうど 50 年前の 1964 年 6 月 30 日に創価学会学生部総会の席上で、創価大学の設立を発表した、ということが出ていました。それから 7 年後、創価大学が実際に設立され、その後大発展していまに至るわけです。正直に申し上げて、私たち 1 期生や 2 期生の時代は、本当に何もありませんでした。本日こうやって大学に戻ってくると、ああ、こういう大学で勉強できたら、幸せだっただろうなあ、と思います。どうかみなさん方は、普段の生活では気がつかないかも知れませんが、本当に恵まれた環境のなかで、勉強ができているということを忘れないでいただきたいと思います。

それでは以上で私の話を終わります。今日ここで話したなかから、何か汲み取っていただければ幸いです。ありがとうございました。